

続・ 珈琲の思い出七

今朝、優子が載っている新聞記事を読んでからの、この急展開に自分でとまどいながらも、僕は優子と二人きりで会えることについて、まさに天に昇るような気持ちだった。多分僕の足は地面から2、30センチは宙に浮かんでいただろう、駅ビルのスターバックスまで急ぎ足で向かうと、店の入り口が見える位置の二人掛けのボックス席に席を取った。

何か飲み物を買っておいた方がいいだろうか？かと言って、優子の好みが何なのかはまったくわからない。それどころか、自分は優子について、あの新聞記事以外のことは全く知らないのだ。そうだ、ネクタイは曲がってないだろうか？髪は？ヒゲは？まさか鼻毛は？朝、顔を洗ったときに鏡を見て以来、自分の顔を一度もチェックしてこなかったことを僕は大いに後悔した。でも今さらトイレに行ってしまったら優子が来たときにもう帰ったと思われるかもしれない。

そうこう考えているうちに、優子が現れた。白いコートに、ザックリとしたニットのセーター、コール天のベージュのズボンを履いている。走ってきたのか、ほつぺたが真っ赤になっている。本屋にいるときはいつもパンツスーツのようなものを着ているから、はじめて見た優子の私服姿だ……。

「か、かわいい……!」、僕は胸がキュンキュンなった。

優子は僕の姿を見つけると、ニッコリ笑ってこちらに駆け寄って来た。

「お待ちしてごめんなさい! ああ、何も飲まずに待っていらっしやっただんですか?? 先に飲んでもらって良かったのに、遅くなって本当にごめんなさい!」(続)